

23.3.12 設計条件の盲点

富岡町長

県原子力発電所所在町協議会長の遠藤勝也富岡町長は
「津波で機器が水をかぶったことを原因に福島第二原子力発電所のトラブルが発生したことは、設計条件の盲点を突かれた感じだ。だが、原子力行政に想定外があつてはならないはず。今後の原子力行政に不安を感じた」とコメントした。



遠藤勝也富岡町長

また、福島第一原発でセシウムが検出されたとの経済産業省原子力安全・保安院の発表を受け、遠藤町長は12日午後2時35分ごろ、町災害対策本部の縮小を決めた。

これに伴い、町消防団員や町職員らは川内村に移動し、避難した町民らの誘導などに当たった。

23.3.12 双葉厚生病院の患者・職員90人

抽出3人全員被ばく

福島第一原発から約3kmの位置にある双葉高グラウンド（双葉町）に12日午後、滞在した双葉厚生病院の入院患者、病院職員合わせて3人に被ばく検査を実施したところ、重い量の放射線を浴びていると測定され除染を実施する。県が同日夜発表した。

3人は避難区域の双葉高グラウンドに移動し、他の約90人の入院患者・職員とともに避難先への搬送ヘリコプターの到着を待っていた。

しかし、ヘリが到着しなかったため病院に戻ったが、グラウンド滞在中に福島第一原発で爆発事故があった。

3人を抽出し県相双保健福祉事務所で被ばく検査をした。この結果、1人から10万カウンターパーミニット、2人から3～4万カウンターパーミニットの放射線が測定された。

立ち会った医師によると、3人とも「重い被ばく量」で、除洗の必要があると診断された。

23.3.12 安全確保申し入れ

共産党県議団と同党県委員会は12日、佐藤雄平知事に原発立地地域の住民の安全確保を申し入れた。

ライフラインの復旧に全力で取り組むことや水、食料、毛布と行った必需品を市町村と連携して確保することなどを求めた。

23.3.12 陸から海に西風 今日の浜通り

12日の県内は高気圧に覆われ、はぼ全域で晴れ間が広がった。13日も高気圧に覆われ県内全域で、おおむね晴れそう。浜通りは陸から海に向けて西の風が吹く見通し。日中、一時南の風に変わるが、夕方から夜にかけて再び西の風になる見込み。

23.3.12 避難区域拡大で県発表が混乱

原発周辺の避難区域拡大をめぐり、県の発表は混乱した。12日午後7時ごろ、生活環境部担当次長は記者団に

「首相官邸からの指示で第一、第二両原発とも避難区域を半径10km以内から20km以内にす

といったん、説明した。しかし、わずか20分後、
「20[㌔]区域への拡大は第一だけだった」
と訂正した。
「拡大する理由は何か」
と問い詰める記者に担当次長は
「全く分からない」
と言葉を詰まらせた。

23.3.12

県内原発ドキュメント

【11日】

- ▲14時46分ごろ 地震発生。福島第一原発、第二原発で稼働中の計7基が自動停止
- ▲16・36 福島第一原発1、2号機で外部電力の供給が失われる。東電が原子力災害対策特別措置法に基づく緊急事態を通報。国内初のケース
- ▲19・03 菅直人首相が福島第一原発で初の「原子力緊急事態宣言」
- ▲20・50 県が福島第一原発の半径2[㌔]以内の住民に避難呼び掛け
- ▲21・23 首相が福島第一原発の半径3[㌔]以内の住民に避難、10[㌔]以内に屋内退避を指示
- ▲22・05 福島第一原発で「炉の一つが冷却できない状態」と判明

【12日】

- ▲0・49 福島第一原発1号機で原子炉格納容器内の圧力が高まったと東電が国に報告
- ▲1・57 福島第一原発1号機のタービン建屋内で放射線レベルが上がっていることが判明
- ▲3・00ごろ 福島第一原発1号機で、国が格納容器の圧力を下げるため放射性物質を含む可能性がある蒸気を弁から放出すると発表
- ▲5・44 福島第一原発1号機の中央制御室で放射線量が上昇し、避難指示区域を半径3[㌔]から10[㌔]に拡大
- ▲6・25 福島第一原発の正門近くで、通常の8倍以上の放射線量を検出したことが判明。放射性物質が外部に漏えい
- ▲6・38 福島第一原発1号機の中央制御室の放射線量が通常の1000

- ▲7・45 福島第二原発にも「原子力緊急事態宣言」を拡大。半径3[㌔]以内の住民に避難、10[㌔]以内に屋内退避を指示
- ▲8・03 東電が福島第二原発の炉4基すべてで蒸気を放出する準備に入ったことが判明
- ▲9・00すぎ 福島第一原発1、2号機の格納容器内の蒸気を放出する作業を開始。福島第二原発1、2号機でも作業開始
- ▲9・10 福島第一原発の正門近くの放射線量が通常の70倍以上に上昇
- ▲11・20 福島第一原発1号機で、炉心水位が低下し燃料が最大90^{センチ}露出したことを示す数値。燃料破損の恐れ
- ▲14・00すぎ 福島第一原発1号機の周辺で放射性物質のセシウムが検出されたことが判明。炉心溶融が起きたことを確認
- ▲15・30ごろ 福島第一原発1号機の格紙容器から蒸気を外部に放出するのに成功したと発表
- ▲15・36 福島第一原発1号機建屋で爆発音がして白煙が上がった。東電社員ら4人がけが
- ▲17・30ごろ 福島第一原発1号機の敷地で測定した放射線量が、1時間に1015マイクロシーベルトを示したことが判明
- ▲17・45ごろ 枝野幸男官房長官が記者会見し、福島第一原発について「何らかの爆発的事象があった」。福島第二原発の周辺住民にも半径10[㌔]圏内からの避難を指示
- ▲18・00ごろ 原子力安全・保安院

倍になったことが判明
▲7・40 福島第二原発の1、2、
4号機が冷却機能を失い、東電が
国に緊急事態を通報したことが判
明

は記者会見で、爆発後の放射線量
の数値などを明らかにせず

23.3.12 「厳しい状況」 小森東電常務

東京電力の小森明生常務は12日夜、記者会見し、爆発事故のあった福島
第一原子力発電所1号機について

「厳しい状況。（核燃料棒が高温で溶ける）炉心溶融の可能性も含め自
己対応したい」

と述べた。その上で、核燃料棒に含まれる放射性物質セシウムの検出を経
済産業省原子力安全・保安院に報告したことを明らかにした。

また小森常務は、福島第一原発1号機に関し

「炉心そのものが通常とは違う状態になっている」

と指摘。

「いろいろな形で原子炉を冷やす努力をしている」

と語り、午後8時すぎに圧力容器に海水を注入して原子炉を冷却する作業を始めたことを明
らかにした。



小森明生常務

23.3.12 爆発で社員ら4人が重軽傷

東京電力福島第一原発1号機の爆発で、社員と委託会社の合わせて4人が重軽傷を負い、
同社が原因を調べている。東電によると、1号機付近で「ドン」という爆発音があり、ター
ビン建屋付近に白い煙が充満した。

4人は爆発当時1号機近くの屋外におり、落ちてきた天井か壁の破片に当たったとみられ
る。一人が骨折、3人は打撲程度のけがだという。

23.3.12 避難地域拡大で国に緊急要望

県、物資確保など

福島第一原発の避難指示対象地域が半径20*に拡大されたことを受け、県は12日、国に4
項目について追加で緊急に要望した。

4項目は住民の避難先の確保、住民の輸送手段の確保、避難先の生活物資の確保、救助活
動を行う自衛隊や緊急消防援助隊の安全の確保。

23.3.12 放医研 医師を緊急招集

福島第一原発1号機での爆発を受け、放射線医学研究所（放医
研、千葉市）は12日、重篤な被ばく患者がいた場合に受け入れる
ため、医師ら全員を緊急招集した。厚生労働省も同日、被ばく医
療支援の医師らでつくる「緊急被ばく医療支援チーム」が害対策
センターに到着したと明らかにした。

厚労省や放医研によると、被ばく患者の緊急治療ができる県内
の医療機関は、県立大野病院や福島医大付属病院など6カ所。県
立医大付属病院に対しては経済産業省が11日、被ばく患者が出た際の受け入れを要請。放医
研も医師と看護師、放射線測定担当者の計3人を12日、自衛隊ヘリで県に派遣した。福島労



放射線医学研究所

災病院や鹿島労災病院（茨城県）でも患者受け入れや応援態勢を準備。患者の搬送先は症状に応じて決める。

23.3.12 県警ヘリが煙目視、異常判断

県警ヘリコプターの搭乗員が原子炉建屋付近から煙と綿のような粉じんを目視し、福島署の災害警備本部に連絡した。本部は「異常事態」と判断、住民らに半径10[※]以内からの早期避難を呼び掛けた。



県警ヘリコプター

23.3.12 電力7社が要員派遣

全国の電力会社7社は12日までに、東日本大震災で被害を受け緊急措置が取られている福島第一、第二原発に原子力災害協力要員約30人を派遣することを決めた。

両原発を持つ東京電力からの要請。東電によると、原子力災害対策特別措置法に基づく要請で、実施は初めて。北海道電力4人、中部電力8人、北陸電力4人、関西電力5人。

23.3.12 タービン建屋 地震時にひび

第一原発2号機

「最も強い建築のはずなのに」ー。放射性物質が外部に漏れた東京電力福島第一原発。2号機のタービン建屋の外壁にひびが入るほどの損失を受けた。

第一原発4号機の原子炉建屋で作業中だった男性は11日午後、突然の大きな横揺れに立っていることができず壁にしがみついた。

「日本で最も丈夫な建屋と思っていた原発がこれだけダメージを受けるのか。建屋全体が崩壊するかと思った」と振り返った。

23.3.12 解説

崩れた安全3原則 事業者、保安院重い責任

福島第一原発1号機は炉心溶融、そして爆発事故で放射性物質を周辺に拡散させた。関係者が丸一日対策に追われたのにもかかわらず「止める」「冷やす」「閉じ込める」という原子力施設の安全3原則は崩れ、規制当局である経済産業省原子力安全・保安院は、爆発から数時間後にも状況を満足に説明できなかった。

原子力安全への信頼は失墜したといえる。

原子力緊急事態宣言の対象となった福島第一、第二の両原発では、運転中の原子炉が揺れを検知して全て自動停止。ここまでは順調だった。

最初の誤算は、自動停止後、第一原発1号機で外部からの電力供給が止まった上に、頼みの非常用ディーゼル発電機が津波などで使えなくなったこと。蒸気の力を利用するわずかな循環系だけでは、炉心を十分に冷やすことができなかった。両原発のほかの原子炉でも、炉心の水位が下がったり、冷却用水源となるプールの水が高温になったり「冷やす」ができなくなる事態が続発した。

専門家も想定外の巨大地震だったとはいえ、事態が悪化した後も安全回復の決め手が見つからないまま放射性物質の拡散に至り、数万人の避難を招いた事態は、教訓というにはあまりに重く、電力事業者や保安院は責任を免れ得ないだろう。

23.3.13

県民12万人避難

第一原発3号機も「炉心溶融」

東日本大震災 水素発生、爆発の恐れ

東日本大震災で、県は13日、原子力発電所から半径20[※]内の避難対象者は約8万人で、周辺地域で自主的に避難した人を含め12万人以上が避難したと発表した。被ばく者は県と中核市の郡山市保健所などのそれぞれの検査で合計111人になった。



川俣町の川俣小体育館で助け合い避難所生活を送る被災者＝13日午後0時20分ごろ

一方、東電は、福島第一原発3号機の原子炉の冷却機能が失われたとして原子力災害対策特別措置法の第15条に基づく「緊急事態」を国に通報し、貯水の注水などの措置を進めた。

気象庁は同日、大震災のマグニチュード(M)を世界観測史上最大級の9.0に修正した。

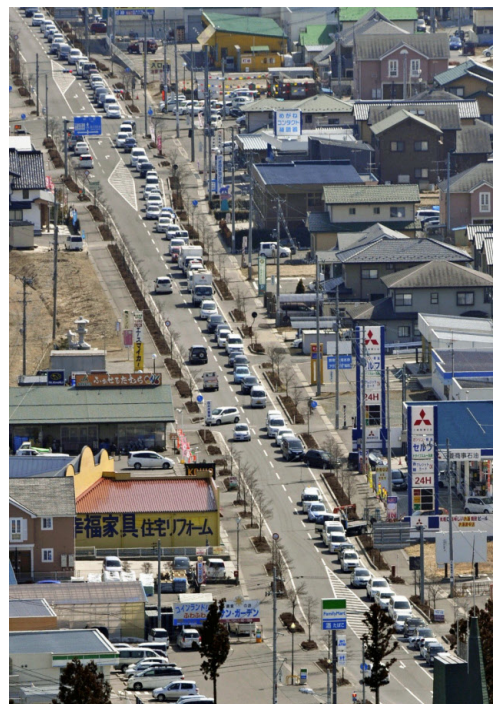
県によると、区域外にある公共施設などに13日正午現在、12万1,369人が避難を完了した。

聞き取りした県の発表によると、双葉や浪江町民は川俣町の川俣小など、大熊町の住民は田村市の古道小体育館や船引町文化センターなどに避難した。

福島第一原発3号機の原子炉は一時的に水位が低下して燃料が露出したとみられ、経済産業省の西山英彦大巨富房審議官は13日、

「燃料棒損傷は免れていない」と述べ、燃料の一部が溶ける「炉心溶融」が起きているとの見方を示した。

3号機は燃料の露出により水素が発生し、原子力建屋の上部にたまった恐れがあり、1号機と同様の爆発の可能性が出てきた。



渋滞

避難する車で渋滞する349号国道＝13日午後0時31分、田村市で共同通信社ヘリから

枝野幸男官房長官は

「(炉心全体が溶け落ちる)メルトダウンの状況にはない。万一爆発しても、周辺の皆さんに影響を及ぼす状況は生じない」

と強調した。

東電は原子炉の蒸気を外部に放出して圧力を下げ、真水、さらに海水を順次注入したが、水位計が示す水位の上昇が止まったため原因を調べている。海水が入った原子炉を再び動かすのは困難で、3号機は廃炉となる可能性が高まった。

周原発周辺では13日午前に放射線量が通常の基準値の毎時500マイクロシーベルトを超えて上昇。午後2時にはこれまでで最も高い1557.5マイクロシーベルトを検知したが、その後低下した。これは、40分ほど滞在すると一般人の年間被ばく線量限度を超える数値。

東北電力によると、宮城県の女川原発の敷地で21マイクロシーベルトを検出した。南に約120^{km}離れた福島原発から放出された放射性物質の影響とみている。

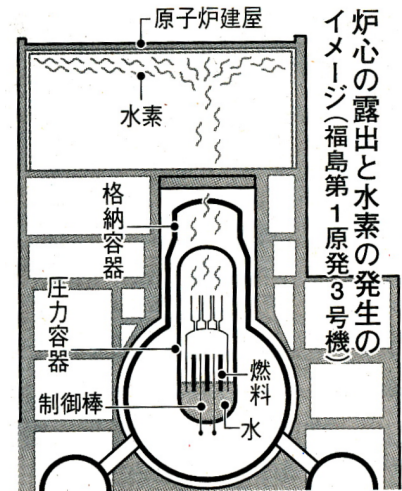
被ばくについて枝野官房長官は

「健康に害を及ぼす被ばくが生じている可能性は低い」と述べた。

経済産業省原子力安全・保安院によると、福島第一の3号機では自動停止の後、給水装履で炉心を冷却していたが13日朝、給水が自動停止。海水に切り替えて給水を再開したもの、一時ポンプが不安定になるなどして燃料の上部が最大で3^{cm}弱、水面上に露出した。

3号機ではプルトニウム・ウラン混合酸化物(MOX)燃料によるプルサーマル発電を実施していた。東電は

「通常燃料と異なる現象は確認されていない」としている。



23.3.13 第二原発も水蒸気放出か

県は13日に開いた原子力災害対策本部会議で、原子炉の冷却機能を失った福島第二原発、1、2、4号の各プラントで、微量の放射能を含む水蒸気の放出が行われる可能性が出ていることを明らかにした。各プラントでは、原子炉格納容器内の圧力を下げるため水の循環ポンプを取り付ける作業が進められている。ポンプが作動しても効果が現れない場合、水蒸気放出に踏み切る。放出想定時刻は1号機が14日午前3時、2号機が同日前午6時、4号機が16日午前5時。

◇ ◇

本部会議で佐藤雄平知事は、原発の安全確保が進まない現状にいら立ちを見せた。会議に出席した東電福島事務所の松井敏彦所長に対し、

「(今回の案件は)電力業界全体の問題だ。しっかりお願いする。命懸けで」

と語気を強め求めた。



佐藤雄平知事



松井敏彦所長

23.3.13 被ばく者111人に

県は13日、双葉地方の男女19人が被ばくしたことを明らかにした。前日の3人と合わせ被ばくの判明は22人となった。

県は同日、福島第一原発周辺から二本松市の県男女共生センターに避難した133人に対し被ばく量を測定するスクリーニングを実施した。この中に、避難区域に長くともまっていた

双葉厚生病院の職員が含まれているため、調査の結果、13人の被ばく量の多いことが判明。国から専門チームの派遣を受け、センター内で除染作業を実施した。県によると、被ばくが確認された22人のうち21人は除染の必要もないレベルで、残る1人も心配ないという。

◇ ◇

郡山市災害対策本部によると、郡山市保健所と郡山広域消防本部は13日、郡山市内の安積高校など6カ所に避難した相双地区の2,229人を対象に放射線の被ばく検査を行った。その結果、89人が被ばくしていることが分かった。

23.3.13 M9.0に修正、世界最大級

気象庁はマグニチュード（M）をこれまでの8.8から世界観測史上最大級の9.0に修正した。

23.3.13 20⁺圏 避難誘導 東日本大震災 自衛隊10万人規模 「情報 迅速に開示」

政府は13日、東日本大震災を受け、福島第一原発20⁺圏内の住民12万人の退避誘導を急いだ。

広範な被災地での救出活動では菅直人首相が自衛隊派遣態勢を過去最大規模の十万人に拡大するよう指示。米軍との協力態勢構築も本格化させた。首相は政府の緊急災害対策本部会合で「一人でも多くの人々が命を救われるよう最大限の努力をお願いしたい」と強調した。

枝野幸男官房長官はNHK番組で、震災対策をめぐり3月中は2010年度予算の予備費2千億円に対応できるとした上で、11年度補正予算編成を念頭に対応する考えを示した。

枝野氏は13日夕の記者会見で、福島第一原発3号機の建屋で水素がたまり爆発する可能性がある」と発表。

12日の1号機の爆発をめぐり情報提供が遅かったと批判されたため

「確実な情報をスピーディーに出すことにした」と説明した。

首相は緊急災害対策本部会合で「孤立状態を来さない範囲で、その先についても準備を進めてほしい」と述べ復興支援対策にも順次取り組む考えを示した。

枝野氏は避難状況について、第一原発周辺10⁺圏内に114人、10～20⁺圏内には18万人弱がまだ残っている一方、第二原発の3⁺以内の避難は完了し、10⁺以内の3万人余りは13日早朝から避難を開始したと説明。避難住民の「被ばくへの不安が高い」として、各避難所に専門家チームが対応する救護所を設けると発表した。



緊急災害対策本部の会合であいさつする菅首相＝13日午前、首相官邸

福島第一、第二原発の状況（13日夜時点）

第一	
1号機	燃料の一部が溶ける「炉心溶融」12日、原子炉格納容器の蒸気を外部に放出。爆発で原子炉建屋損傷。炉心に海水注入。
2号機	自動停止、炉心に注水。蒸気放出を実施予定。
3号機	13日、冷却機能が失われ、部分的な炉心溶融の可能性。蒸気を外部に放出し、炉心に海水注入。原子炉建屋上部に水素がたまり、爆発の可能性。
4号機	定期検査中
5号機	定期検査中
6号機	定期検査中
第二	
1号機	自動停止。蒸気放出を検討。
2号機	自動停止。蒸気放出を検討。
3号機	自動停止。蒸気放出を検討。
4号機	自動停止。蒸気放出を検討。